

## 新しい広場＝公共劇場へ

人々が文化的に互いを触発しながら心豊かに暮らすことのできるまちをつくるためには、地域で育まれた文化資源がもつ“人と人を結び付ける力”が不可欠です。しかし今、地域の文化資源が担ってきた重要な役割は、外から入ってくる大量の情報や商品に蔽い隠され、人々の目に映りづらくなっているように思えます。

ここ3年、キラリふじみは富士見市の文化的な財産に光をあて、その可能性を探り、活かすためのプログラムを市民とともに進めてきました。

昨シーズンでいうと、地域の歴史や現状に造詣が深い市民を講師として招いて、「自然とともに生きた縄文人」「みんなの食卓～知ること・食べること」「富士見の農業と暮らしの歴史」「富士見における近代村の移り変わり」などの一連の講座を行いました。年末には、市内で個性的な農業を営む方々と共同で、シンポジウム「富士見の農業～一粒の種から見えること」を企画しました。これらを通じて、長い歴史の中でこのまちに築かれてきた生活文化の根っこにあるものはなにかを考え、それを当館の活動に結びつける方法を模索しました。

今シーズン、こうしたプログラムをさらに積極的に推し進めていきます。〈子育て〉と〈地域づくり〉を劇場がリンクさせるアイデアを練るための市民フォーラム…市民が取材して、まちの映像作品を作るワークショップ…富士見の特産品をプロデュースして外部に発信する仕事…市内の他の文化施設と連携したイベントの計画づくり…等に取り組んでいきます。

もうひとつのハイライトは、5年目を迎える「レパトリーの創造と発信」の活動です。海外の劇場との初の本格的な共同制作となる『颱風奇譚 태풍기담』（ソンギウン作、多田淳之介演出）では、秋に韓国に滞在して創作初演し、その後、東京と富士見で上演します。一昨年、好評を博したダンスのレパトリー『絵のない絵本』（白神ももこ構成・振付・演出）を再演し、国内2都市へ巡演します。田上豊は新作を上演します。

地域の内外とネットワークを結び、多様な人とモノが交錯する中から誕生する“新しい広場＝公共劇場”、キラリふじみにどうかご注目ください。

富士見市民文化会館 キラリ☆ふじみ  
館長 松井憲太郎

## 手を取り合う／争う私たちのイメージ

2015年は第二次世界大戦が終わって70年、あれから私たちにも様々なことが起きましたが、一体何が変わったのか、ということをよく考えます。変わらないのなら未来に何が残せるかということも。せめて未来に恥じない時代にしたいものです。

400年以上前のシェイクスピアの戯曲でも戦争、争いは絶えません。『ハムレット』は大義による争いに悩み、『ロミオとジュリエット』では家同士の争いから罪の無い若者達の悲劇が生まれます。

更に時代を遡り紀元前425年、今から2440年前のアリストパネスによるギリシャ喜劇『アカルナイの人々』では、戦争中に一人の男が自分の家だけで敵国と和平を結び、裏切り者と糾弾されながらも唯一交易可能な彼の家にだけ様々な人や物が行き交います。この話を下敷きにした作品を3月に上演するので楽しみにしてください。そして2015年は1965年の日韓国交正常化から50周年でもあります。「赦し」の物語といわれるシェイクスピアの『テンペスト』を下敷きに久々にキラリふじみで創る日韓合作にもご期待ください。

有史以来人類は争いと共にあり、同時に芸術も争いと共にありました。あのジョン・レノンの名曲『イマジン』はこれまでいくつかの国で放送禁止になっています。芸術はそういう時代の憂き目にも遭って来ました。世界の人々が手を取り合い、争いが無くなることをイメージされると困る時代があったのでしょうか。今はどうでしょうか？

いつの時代も芸術の役割はイメージを生むことだと思っています。私たちは個人、家庭、地域、国、様々な境界と隣合わせで生きています。争い続けるのも人間ならば、手を取り合ってきたのも人間です。イメージしてみてください、争うことを、手を取り合うことを、大切な人の気持ちを、大切ではない人の気持ちを。イメージした時の自分の気持ちとの出会いが芸術の豊かさです。イメージは自由です、正解もありませんが、イメージできないものもありません。時間も距離も越えてイメージが生まれる作品を、様々な自分に出会える場所をこれからも作りたいと思っています。

富士見市民文化会館 キラリ☆ふじみ  
芸術監督 多田淳之介